

一茶の俳文碑

俳諧師小林一茶は文化九年（一八一二）、二月十二日に流山の秋元双樹（さうじゆ）と連れ立って東海寺（布施の弁財天）に詣で、ここで次のような俳文と句を詠んでいる。布施東海寺に詣けるに、鶏（とり）どもの迹（あと）をしたひぬることの不便（ふびん）さに、門前の家によりて、米一合ばかり買ひて、菹蒲（すみれたん）公（はら）のほとりにちらしけるを、やがて仲間喧嘩（げんくわ）をいく所にも始めたり。其うち木末（すえ）より鳩雀（ほとすずめ）はら、とび来たりて、心しづかにくらひつゝ、鶏の来る時、小ばやくもとの梢（こすえ）へ逃さりぬ。鳩雀は蹴（け）合（あい）の長かれかしと思ふらん。土農工商其外さま、の稼（なりは）ひ、みなかくの通り。

米蒔（まく）も 罪ぞよ鶏が け合（あふ）ぞよ 一茶

一茶五十才の時の文と句である。（一茶の句集「株番（かぶばん）」に収められている一文である。）また一茶の七番日記によると、その日（二月十二日）は雨に濡れて流山の双樹の家に帰っていることがわかる。元来この句と文は「米蒔塚・蹴合塚（けあひづか）」などと呼ばれてきているが、ここに「一茶の俳文碑」として建立するものである。碑文の文体は一茶の直筆（じきひつ）を拡大して刻入したものであって、多くの人々が協力し合つて建立したものである。

昭和六十二年 五月十七日 建 之

小林一茶 俳文碑建設委員会